

半導体漫遊記

(265)

湯之上隆

世界的に半導体が脚光を浴びている。米国に制裁を科せられた中国は、約20兆円ものIC基金を積み増し、自国で半導体製造を行おうとしている。米国は半導体に関する二つの法案をつくり、約5・5兆円を補助してTSMCを誘致することに

なった。そのような中、日本では衆議院の科学技術・イノベーション推進特別委員会が、6月1日(火)9時~12時30分に開催され、半導体政策に関する討論が行

われた。その委員会には理化学研究所理事、一橋大学名誉教授、そ

るという内容だった。筆者は1週間ほどかけて資料をつくり、委員会に臨んだ。その要点は以下の通りである。

1980年代中旬、日本はメインフレーム用を超高品質DRAMを製造して、世界

を基に間違った処方を行い続けたことによる。その結果、病気が治らずより悪化し、エルピーダなど死者も出た。従って、今に至っては日本半導体産業は挽回不能である。

しかし、希望の光もスラリ、薬液など半導体材料も日本が圧倒的に強い。そこで筆者は次を提言した。日本半導体デバイスには税金を注ぎ込むのは無駄である(歴史的に経産省、革

新機構、政策銀が出てきた時点でアウトである)。希望の光は、今でも競争力が高い7種類の製造装置(や部品)および製造材料にある。よって「強い

と」を第一の政策に掲げるべきである。当初、筆者は委員会で大ブーイングが来るかもしれないと思っていた。何しろ、過去の政策を全否定するのである。ところが、意外なことに意見陳述後、盛大な拍手が起きた。さらに、3人の意見陳述に続く約2時間半の質疑では、質問の過半(6割以上?)が筆者に集中した。委員会終了後には、名刺交換を求め、衆議院議員の行列ができた。筆者の意見は、多くの衆議院議員の心に届いたのかもしれない。今後、真に有効な政策が立案されることを期待したい。(微細加工研究所・所

製造装置、材料に希望の光

衆議院で半導体強化へ意見陳述

して筆者の3人が参考人として招致され、1人15分の意見陳述を行った。

シエラ80%を独占し、エルピーダやルネサスなど合弁会社を設立したが、全て失敗し

た。その原因は「過剰技術で過剰品質を作った欧米の装置であって

も、それぞれ数千点の部品のうち、6~8割が日本製である。加えてウエハ、レジスト、

事前に衆議院の事務局から伝えられていた課題は、「過去を振り返って反省・分析し、未来の半導体政策を考え

くり続け、結果的に過剰技術で過剰品質を作った」という病巣を見抜けず、間違った診断を行い、そ

うち、5~7種類は市場を独占している。また

ある。前工程だけで十数種類ある製造装置のうち、5~7種類は市場を独占している。また



国会議事堂

長)